令和４年度　学校総合評価

１　今年度の重点目標に対する総合評価

今年度の重点課題として、次の３項目(①学習活動　②進路支援　③特別活動)においてそれぞれ目標を設定して取り組んだ。

（１）学習活動「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現（教員の日常的な学び合いや授業力の向上）」

校内において同僚とのＯＪＴを通して日常的に学び合ったり、教員自身が能動的・主体的に考えて授業力の向上を図ることを目指して授業をしたりすることが、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考え、互見授業週間（９日間）を実施した。授業を実施するに当たり、授業者は授業の目標や評価規準、参観者に見てもらいたい点や相談したい点等を記載した互見シートを作成した。また参観者は本校の授業づくりにおける共通ツール「授業づくり・授業参観シート」に、良かった点や授業者の悩みに対する助言等を記入し、授業者と参観者とのやり取りをした。

授業者からは参観者と授業について話すことで、より良い授業づくりを目指すきっかけになったという声が聞かれ、互見授業週間後も、お互いに声を掛け合って授業を参観する教師の姿がみられた。

（２）進路支援「生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるための進路指導の充実」

生徒の実態やニーズ、居住地、家庭環境等から本校の生徒の進路先は多岐にわたっている。日頃から生徒自身が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるようにしたいと考えているが、生徒の自己評価と教師や事業所等からの他者評価に開きがあることも多い。そこで、生徒自身が校内実習、就業体験を通して自己理解を深めることができるように、体験の事前や事後に用いる振り返りシートを作成し、それを用いて生徒との面談を実施した。

校内実習や就業体験後には振り返りシートを活用し、生徒一人一人の実態に応じて教師との面談を実施することにより自己理解が進み、自分の仕事の適性や、体調管理のために必要なことに気付く生徒の姿がみられた。

（３）特別活動「児童生徒が書籍に触れ、学習や余暇活動につなげる機会を増やすための図書環境の充実」

本校の図書室は視聴覚室と併用しているため授業等で使用されることも多く、図書室として利用できる時間は限られている。昨年度の図書貸し出し冊数も少なく、児童生徒が書籍に触れて、学習や余暇活動につなげる機会を設定したいと考え、取り組んだ。

図書委員会の生徒たちが中心となってアイディアを出し、いくつもの図書室利用促進のための取組を実施した。また、学校図書館司書にも協力してもらいBOOK TALKなどの行事を計画的に行ったことで、その中で紹介された本に進んで手を伸ばす児童生徒もいた。今年度は図書室利用者が大幅に増え、継続して本の貸し出しに訪れる児童生徒もみられるようになった。

２　次年度へ向けての課題と方策

・今後も課題を改善しながら「互見授業週間」を実施するとともに、互見授業週間に限らず、ふだんから気軽にお互いの授業を参観したり、放課後に授業づくりについて話し合ったりできる雰囲気をどのように作っていけばよいのかを学校全体で考えていきたい。

・学校全体として、一人一人の教師が進路支援に関するスキルを向上させることが求められる。また一番身近にいる家族と校内実習や就業体験後の振り返りを共有するとともに、生徒自身が自己理解を深めていくための振り返りシートも含めた進路に関する情報の蓄積方法を考えていきたい。

・デジタル絵本や大型絵本等、本校の児童生徒が興味をもつきっかけになるような本も取り入れ、身近に図書を手に取りやすい環境整備を継続して行っていく必要がある。BOOK TALKや読み聞かせなどの活動を継続的に実施し、読書習慣が身に付くような機会の設定を工夫していきたい。

令和４年度　富山県立にいかわ総合支援学校アクションプラン　－１－		
重点項目	学習活動（研修部）	
重点課題	児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現（教員の日常的な学び合いや授業力の向上）	
現　　状	ベテラン教員の大量退職と若手教員の急増という教員構成の急激な変化に伴う若手教員育成や、新学習指導要領実施における「主体的・対話的で深い学び」という学びの転換への対応から、校内研修を充実させ、教員の指導力を高める必要性が年々高まってきている。 そこで、ふだんの授業を見合う「互見授業週間」を設定し、教員の、学校内において同僚の教員とともに支え合いながらＯＪＴを通じて日常的に学び合う姿や、教員自身が能動的・主体的に考えながら、授業力の向上を図る姿を目指す。そうした実践の積み重ねが、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考える。	
達成目標	互見授業の実施や参観が、日常的な学び合いや授業力の向上につながったと答えた教員の割合 80%以上	
方　　策	・互見授業週間（２週間程度）を実施し、その後アンケート調査を実施する。 ・参観してもらいたい授業を決め、授業を実施する。 ・授業を実施するに当たり、その授業の目標や評価規準、参観者に見てもらいたい点や相談したい点等を記載した互見シートを作成する。 ・全教員が、互見授業週間中に公開された授業を１回以上参観する。 ・参観者は、本校の授業づくりにおける共通ツール「授業づくり・授業参観シート」に、良かった点や授業者の悩みに対する助言等を記入する。記入したシートは、授業者に渡し、今後の授業の参考にしてもらう。また、校内共有フォルダ内でも公開し、同じ授業の参観者や他の授業の授業者等にも参考にしてもらえるようにする。	
達 成 度	88 名中、学び合いや授業力の向上につながったと答えた教員は 72 名（ｱﾝｹｰﾄ回収率85%：75名/88名） 82%	
具体的な取組状況	・研修部で方策を再検討し、以下の点を変更して実施した。 ①10 月 24 日～11 月４日までの９日間で実施。 ②様々な多くの授業を参観できるよう、期間中の全ての授業を参観対象とする。 ③全教員が、期間中に公開された授業を２回以上参観（１時間通してではなく、一部のみの参観でも可）とする。 ・参観者が予定を立てて授業参観をしやすいように、授業予定表（活動内容や活動場所、互見シートの有無を記載）を校内インフォメーションや職員室に掲示した。 ・毎朝、授業者や授業参観者の言葉、役に立つ情報の紹介、互見授業を効果的に実施するための方法等を校内インフォメーションで紹介した。 ・互見シートに書かれた評価規準に関する悩みについて、一部の授業者に返答した。 ・互見授業週間実施後のアンケートから、教員間で互いに学び合った内容等を共有した。	
評　　価	B	参観者と授業について話すことで、より良い授業づくりを目指すきっかけになったという声や、互見授業週間後も、お互いに声を掛け合って、授業を参観する教師の姿がみられた。参観者が参観した授業が、必ずしも授業者が助言をもらいたかった授業ではなかったことから、授業者と参観者とで満足度に差がみられた。
学校関係者の意見	・ふだんの生活の中でお互いに学び合うことが大切である。大勢で参観されると、そうでなくても評価されるという雰囲気になってしまうことがある。若手教員には一人一人に担当者を決め、月１回程度、個別にいろいろな話をする機会を設けたり、授業を見て、個別に助言をしたりするような機会も必要かもしれない。 ・改善点を伝えるだけではなく、褒めるところは褒めることも大切である。	
次年度へ向けての課　　題	・互見授業週間後のアンケートから、「来年度以降も互見授業週間を実施するとよい」といった声が多く聞かれた。今後も課題を改善しながら、工夫をして実施していきたい。 ・互見授業週間の期間だけではなく、ふだんから気軽にお互いの授業を参観したり、放課後に授業づくりについて話し合ったりできる雰囲気をどのように作っていけばよいか、学校全体を通して考えていく必要がある。	

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和４年度　富山県立にいかわ総合支援学校アクションプラン　－２－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">進路支援（高等部）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるための進路指導の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">生徒の実態やニーズ、居住地、家庭環境等を鑑みた本校の生徒の進路先は多岐にわたり、進路指導部では機会を捉えて情報提供してきた。しかし、生徒が自己理解を深め、主体的に進路選択ができるようにするために、どのように進路指導を進めていけばよいか困っている教員が多い。また、生徒の自己評価と教師や事業所等からの他者評価に開きがあることも多い。
そこで、進路に関する学習内容を教育課程上、生活単元学習で扱うことを年間指導計画に明記することにし、計画的に進路指導を進める必要がある。さらに、教師との対話（面談）を通して、生徒が自分の適性に気付き、自己理解を深め、主体的に進路選択できるように支援することが重要であると考える。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td colspan="2">６月や 11 月に行う校内実習、就業体験の事前、事後学習における生徒との個別面談（事前に１回、事後に１回）の実施</td></tr>
<tr><td colspan="2">生徒一人につき・・・年間 計４回</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">○生徒自身が校内実習、就業体験を通して自己理解を深めたり、教師が気付きを促したりするための視点（ポイント）を教師間で検討し、事前、振り返りシートを作成する。
○自己理解ができるように事前、振り返りシートを用いて校内実習、就業体験の事前・事後学習で生徒との面談を実施する。
・事前学習では、進路学習で学んだこと、過去の就業体験の課題等を手掛かりに、働くことや生活に関する目標を考える。
・事後学習では、日誌や写真等を見ながら、自分にとって作業種が合っているか、成果や課題は何かなどを振り返る。
○進路指導部と協力して、生徒や保護者に教材や学部通信等で卒業後の進路先となる事業所の情報を提供する。また、教師には学習会の機会を設定する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達 成 度</td><td colspan="2">個別面談を年間４回実施した生徒は 51 名（高等部全生徒 53 名）</td></tr>
<tr><td colspan="2">96%</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・校内実習では、１限は「自分の体調把握」、２～５限は「作業（企業や学校から委託された作業）」、６限は「余暇につながる活動（選択して活動）」として行った。事前学習では自分の課題を見つめ直して生活や働くことに関する目標を決め、事後学習では卒業後の生活をイメージして自分の生活や体調管理、働くこと、余暇等を考えることができるようなワークシートを作成した。就業体験でも同じような項目を設けた。
・教育課程Ａ・Ｂの生徒との事後学習では、本人が記入したワークシートや体験先の担当者が記入した評価表等を用いて、実習や体験の様子を振り返りながら担任等が面談をして、生徒自身の適性や課題に気付くことができるようにした。
・教育課程Ｃ等の生徒とは、事前学習では見通しをもって取り組むことができるように、体験先や日程等を知らせ、絵カード等で目標を確認した。事後学習では就業体験の写真を見て活動を振り返り、前期・後期で２か所体験した生徒は、事業所名を聞いて２か所の写真の中から、行きたい体験先(頑張った活動)を生徒が自分で選択できるようにした。
・進路指導部と協力して生徒や保護者、教師に向けて、働くために必要な力や求人票の見方等を校内に掲示したり、学部通信や進路通信を配布したりして情報を提供した。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>Ｂ</td><td>・実習や体験後の教師との面談を通して自己理解が進み、自分の仕事の適性や、体調管理のために必要なことに気付く生徒の姿がみられた。
・若手の担任との進路指導に関する学習会（相談会）を十分にもてなかった。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="2">・生徒が多様な経験を通して、どんなことに向いているのか、自分は何ができるのかなど自分について考えていく機会を設け、積み重ねていくことが大切である。
・児童生徒自身が夢を描けるような体制を作ることができたらよい。中学部段階から高等部卒業後の進路先となる福祉事業所等の見学を保護者、本人に勧めていく。
・卒業生の先輩から話を聞く際に、余暇や楽しみなどの仕事以外のことも話してもらう機会を作っていくとよい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　　題</td><td colspan="2">・生徒が自己理解を深めていくために、生徒が活動を記録し蓄積する教材を次年度に引き継ぐことができるように、学部で検討する。
・若手担任との進路指導に関する学習会や相談会の実施をするための時間を計画する。</td></tr>
</table>

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和４年度　富山県立にいかわ総合支援学校アクションプラン　－３－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">特別活動（情報図書部）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">児童生徒が書籍に触れ、学習や余暇活動につなげる機会を増やすための図書環境の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">昨年度の図書貸し出し冊数で、５冊以上借りた児童生徒は16名しかおらず、そのうち中学部は１名、高等部は０名で貸し出し冊数が少なかった。また、高等部の生徒の中には、休み時間などに来室しても本を借りずに図書室を出ていく生徒も多くみられた。本校は視聴覚室と図書室を併用しているため、授業で使用されることが多く、図書室として利用できる時間も限られ、それも貸し出し冊数が伸び悩む原因の一つと考えられる。
また、学校図書館司書は年間７回程度の来校が予定されているが、書籍の整理が中心となっている。そこで、昨年度から学校図書館司書による BOOK TALK の取組を行っているが、参加しているのは小学部のみであり、読書活動を広げる活動に生かし切れていない。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>① 図書室の利用者
前・後期の各学期に１回以上図書室（視聴覚室）を利用した児童生徒</td><td>② BOOK TALK（本の紹介活動）の実施
学部ごとに実施</td></tr>
<tr><td>全校児童生徒の三分の一以上</td><td>学部ごとに年間　１回以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">○視聴覚室前廊下壁面に、新たに展示型書架を設置し、エリック・カールの大型絵本や、BOOK TALK の紹介コーナー、来室者数を示すような掲示等を新たに設ける。
○来室者の名前や読んだ冊数などが視覚的に分かかるような掲示物を作成し、読書カードに記入しなくても気軽に書籍に触れる機会の励みとなるような方法を試みる。
○図書委員会の活動で、生徒たちがアイディアを出し合い、利用したくなるような図書室づくりに取り組む。
○BOOK TALK の取組を全校児童生徒に紹介する。学校図書館司書とも協力して、児童生徒や教職員に校内の書籍を多く利用してもらえるよう、書籍を手にしやすい本の展示方法を工夫する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>① 図書室から図書の貸し出しを行った児童生徒の割合……91％</td><td>②学部ごとに１回ずつ実施
（9月：中学部、10月：高等部、12月：小学部）</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td>・図書委員会の生徒がアイディアを出し、校内放送で定期的に図書室利用を呼び掛けた。本の貸し出し数に応じてしおりやプレゼント、認定証の発行、来室した後にシールを貼る活動などを行った。1 月末までに全校児童生徒のうち91％が今年度１回以上図書室を利用した。</td><td>・学校図書館司書の協力も得て、BOOK TALK を実施した。集中して話を聞く児童生徒も多く、BOOK TALK 後には、紹介された図書に手を伸ばす児童生徒の姿が多くみられた。教員も担当する児童生徒の興味・関心を示すテーマを知る機会となった。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>A</td><td>図書委員会の生徒たちが中心となって図書室利用促進のための取組を実施したり、学校図書館司書と協力して BOOK TALK などを行ったりしたことで、図書室利用者が増え、継続して本の貸し出しに訪れる児童生徒が増加した。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="2">・図書室の利用の仕方やお薦めの本を知る機会を設け、自分で読みたい本を手に取れるようにしたらよい。
・読む機会を増やしたり、好きな本に出合えるように、大型絵本、デジタル絵本等、文字が苦手でも本に興味をもってもらえるきっかけになるような本も取り入れたりしたらよい。
・重度の子供には読んでくれる人が必要になる。読み聞かせなど他の人の手を借りて楽しめる機会を設けたらよいのではないだろうか。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　　題</td><td colspan="2">・年度当初に、図書室や図書カードの利用の仕方やお薦めの本を知る機会を設ける。
・デジタル絵本や大型絵本等、本校の児童生徒が興味をもつきっかけになるような本も取り入れ、身近に図書を手に取りやすい書架コーナーの設置を継続して行う。
・BOOK TALK や読み聞かせなどの活動を継続的に実施する。そこで紹介した書籍を展示したり、授業や休み時間に定期的な読書タイムを設けたりして、読書習慣が身に付くような機会の設定を工夫し、より図書の活用が広がるように取り組む。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）